

氏 名	おか ざき ひろ き 岡 崎 宏 樹
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 162 号
学位授与の日付	平 成 12 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 社 会 学 専 攻
学位論文題目	聖なるものの社会学 ——デュルケーム理論の再検討——

論文調査委員 (主 査) 教授 井 上 俊 教授 寶 月 誠 教授 筒 井 清 忠

論 文 内 容 の 要 旨

聖俗理論とよばれる分析方法是社会学において独特の方法論的意義を有する。聖—俗対照図式をパースペクティブとして用いて分析する聖俗理論は、宗教現象の研究だけでなく、社会現象の研究にとっても有効である。なぜなら、宗教的世界がそうであるように、社会的世界においても功利性や有用性を超越した水準における行為と思考が展開するからである。聖俗理論は、社会的世界に浸透する聖の作用をとらえることで、非合理的、非論理的とみなされがちであった非功利的な人間行動に対し理解の光を投げかけ、聖の作用を感受しつつ展開する人間行動が社会秩序の根幹に関わることを示してきた。

フランス近代社会学の創始者エミール・デュルケーム(1858—1917)は、聖—俗の対照を社会—個人の対照と重ねて理解する独自の聖俗理論を展開した。デュルケームは、社会集団が一定の凝集性を備えた統合を成立させるためには、集合的な沸騰状況から析出される社会の象徴に対する共同崇拝が不可欠であると論じる。共同体の象徴としての聖こそが社会秩序の基本原則であるとみなすデュルケームの分析は、秩序はいかにして可能かという社会学の根本問題に特別の寄与をもたらすものと評価されている。しかしながら、「社会と神は一つである」という命題に集約的に示されるように、デュルケーム理論はあらゆる聖を社会に由来するものとみなし、それを社会統合の機能に関連づけて解釈する。そのため、彼は、聖の作用がもつ非社会的な側面や無秩序的な側面を現象として記述しているにも関わらず、それにたいして十分な理論的説明を与えてはいないのである。

デュルケームが聖と社会を同一視したのに対し、個人と社会が構成する有用性の世界の「外」の水準において聖を把握したのが、ジョルジュ・バタイユ(1897—1962)である。この水準における聖をバタイユは至高性と呼ぶ。バタイユは、至高性の聖を非社会的で無秩序を喚起するものととらえ、聖と社会の關係にたいする関心をデュルケームと共有しつつも、デュルケーム理論とは決定的に異なるパースペクティブから議論を展開している。

本論は、デュルケーム理論における聖と社会をめぐる分析の問題点を、バタイユ理論と比較検討することによって明らかにし、至高性の観点からデュルケームの議論を再構成することで、社会学的分析における聖俗理論の新たな可能性を探求する試みである。オーストラリア先住民の宗教トーテミズムの諸事実を分析することをおして宗教と社会の一般理論を呈示した『宗教生活の原初形態』(1912)は、デュルケーム宗教社会学の集大成とみなされている。本論におけるデュルケームの聖俗理論の再検討は、主としてこの著書を対象に行われる。

本論は序論および2章(7節)から成る。考察の順序は以下のとおりである。はじめに、デュルケーム理論の前提となる二元論の社会哲学と、バタイユ理論の前提となる存在論哲学を検討し、社会理論の比較検討のための基礎作業をおこなう。これにより両理論の基本前提の相違と聖概念の相違が明確になるだろう(序論)。次いで、デュルケーム理論における宗教概念の概念規定について検討する。デュルケームは宗教を道徳と理性によって規定したが、この理論規定が宗教現象における諸事実と矛盾する点について考察する。またバタイユの議論によって、二元論の世界がいかにして構成されるのかを検討し、デュルケームの宗教概念における矛盾が、二元論のパースペクティブの論理体系それ自体に起因することを示す(第1

章)。さらに、デュルケームが聖の作用を記述するために呈示した「集合力」概念を検討し、その理論的矛盾を明らかにする。整合的な現象分析のためには、非人称の力として感受される聖の作用を三つの次元に分類すべきことが論じられる。最後に、力の体験と事後的解釈の問題に論及する（第2章）。以上の検討から、二元論を前提としたデュルケームの理論体系の問題点と、聖を至高性の水準において把握したバタイユ理論の可能性を呈示する。

序論では、デュルケームとバタイユの理論体系の基礎であり、社会学的分析の根本原理となっている両者の哲学を比較検討する。デュルケーム社会学の基礎は、二元論的世界観に準拠した独自の社会哲学である。二元論的世界観においては、人間は魂と肉体（精神と物質）の二元性を有する存在と観念されているが、デュルケームはこの二元性は、人間の精神の働きが実際に二元的であることの反映であると解釈する。この二元性は、概念的思考と感覚、道徳的活動と生理的欲求の対立において示される。対立項の前者は社会に由来する「集合意識」の働きであり、後者は有機体由来する「個人意識」の働きである。このようにデュルケームが、個人意識を超えた地平に集合意識を想定したのにたいし、バタイユは個人意識と集合意識が志向する「有用性」を超えた地平に「至高性」を想定する。至高性は、いかなる有用な目的にも奉仕することなくエネルギーを消費する「消尽」の瞬間に、対象をもたない「非—知」の意識として現出する。非—知においては、差異化された秩序が無化されるため、主体と客体の分割が不在になり、外界との相互浸透が生起する。至高性は、集合意識と個人意識によってデュルケームが想定する二元論的世界の「外」を表示する概念である。

第1章「パースペクティブとしての聖と俗」では、聖なるものの本質は何によって規定しうるのであるかという問題を検討し、社会秩序と聖の関係を考察する。デュルケームによれば、宗教を特徴づけるのは道徳的活動と概念的思考である。聖—俗の二元性は、集合意識—個人意識の反映である。なぜなら、聖なる事物とは、社会集団が合一するときに構成される集合意識が象徴化された対象であり、共同体の象徴であると考えられるからである。ゆえにデュルケームは宗教を集合意識（道徳的活動と概念的思考）の水準において規定し、聖なる象徴を共同体の秩序を統合するものとして論じた。ところが、デュルケームが理論を証立てる具体的事例として記述した「積極的礼拝」の諸事実は、宗教現象の中心には、秩序の無化を生起させる道徳的規範の侵犯行為や概念的思考の不在の経験が存在することを示している。つまり理論的規定と記述された諸事実が矛盾している。

聖の本質を至高性によって規定するバタイユ理論の観点からすれば、儀礼における道徳的規範の侵犯や概念的思考の無化は、宗教の根底にある運動が強烈さという「価値」を追求していることを示す事実として解釈される。バタイユによれば、原初的世界の宗教にとって共同体秩序の統合は二次的な価値しかもたない。至高性の聖に優位をおく原初的世界の価値が転倒させられて、聖と俗の境界が移動し、神的世界が道徳と理性と結合するときに成立するのが、二元論的世界である。二元論的世界観においては、不浄の聖として観念されていた＜至高性の聖＞は俗の側へと位置づけられる。デュルケーム理論において、宗教が道徳と理性によって規定されているのは、それが聖・道徳・理性の結合によって成立した二元論的世界を前提とした理論体系だからである。二元論のパースペクティブを前提とすれば、聖が、善と義務という道徳の水準および理性の水準において説明されることが必然となるが、そのような理論体系は、悪もしくは善悪の彼岸を示す諸事実が（原初的）宗教に存在する事実を説明できない。この理由から、デュルケーム理論は、これら暴力性の諸事実を宗教の本質にとってあたかも余分な現象であるかのように説明しているのである。

では、聖の本質とは何か。デュルケーム理論において、聖性は超越性の水準において把握されている。聖が聖であるのは、それが俗を超越しているからである。聖と俗の分離は、概念的思考が感覚を超越し社会が個人を超越していることを、事物の上に表現したものであると説明される。ところが、デュルケーム自身が分類したように、宗教には、聖と俗を分離する「消極的礼拝」だけでなく、両者を接触させる「積極的礼拝」が存在する。これは、聖の本質が俗との分離・超越のみから導き出せないことを示しているのではない。

バタイユ理論において聖の本質は至高性として把握されている。至高性とは、存在の意識が存在にとって外的な原因によって規定されない内在的な様態を指す。これが体験される非—知の瞬間においては、言語を媒介として客体を認識する主体の思考作用が無効となり、世界が直接無媒介に内在的に感受される。これは主体の意識における秩序の無化と言える。聖が至高性の次元を含むものであれば、宗教における暴力性の意味はより明確に把握される。この点では、聖なるものの本質を、超越性の水準で把握するデュルケーム理論よりも、内在性の水準で把握するバタイユ理論の方が有効であるだろう。そして

秩序問題は、統合機能が前提される超越性の聖ではなく、秩序無化の運動とみなされる内在性の聖から再考する必要があるだろう。

第2章「力の社会学——〈非人称の力〉をめぐる」では、聖なるものが人間にいかなる体験として感受され、その体験がどのように社会的な意味世界のうちに位置づけられるのかを検討する。

デュルケームとバタイユはともに聖の体験を非人称の力の体験として記述する。ところが両者における「非人称」の意味は根本的に異なる。デュルケームが非人称の力を、「集合力」すなわち個人を超越した社会に由来する力として解するのに対し、バタイユはこれを消尽する力の水準で記述する。デュルケームの説明によれば、集合力は、集合意識が個人意識に働きかける様式を示す概念であり、外から拘束し方向づける力として感受される。ところが、デュルケームは、この〈超越的な力〉を、内奥から噴出し拘束を逃れて消尽する〈内奥的な力〉と同じ水準で説明するために、集合力概念には論理的矛盾が見られる。

同様の矛盾は、自己超越の宗教的体験についての説明においても見出される。デュルケームはあらゆる宗教体験を集団の合一の経験として解釈する。聖の体験とは、個人意識の水準を超出して強烈な集合意識を経験することを意味する。ところが、デュルケームが記述する儀礼における消尽の体験が示すように、宗教体験のうちには、集団の合一とは別水準の自己超越の体験が存在する。デュルケームは、個人意識と集合意識の「外」へと超出するこの体験を、集合意識の水準で論じようとして議論を混乱させている。本論は、薬物による陶醉についてのデュルケームの議論を詳細に検討することにより、こうした議論にどのような矛盾があるのかを示す。

消尽する〈内奥的な力〉や〈外への自己超越〉をデュルケーム理論が整合的に説明できないのはなぜか。それは、この理論が集合意識と個人意識の二元性を前提とした体系だからである。二元性を前提とすれば、感受されるすべての力を集合意識の働きとして解釈し、すべての自己超越の体験を、個人意識から集合意識へ至る〈上への自己超越〉として説明するのが論理的必然となる。だが、バタイユのいう至高性の次元を理論的パースペクティブにおさめるならば、〈内奥的な力〉は拘束する集合力と異なる水準において位置づけられるため、より整合的な説明が可能になるだろう。

デュルケームが記述した諸事実をもとにすれば、非人称の力は三つの水準に分類できる。超越的な力としての集合力は、〈想像的合一の力〉〈認識構造の力〉に二分しうる。前者は、対面的な集合状況において、合一が想像的に観念された場合に喚起される力を指示する。後者は認識構造が内なる社会として行使する力を指示する。また内奥的な力は〈消尽する力〉である。これはいかなる有用な目的にも従属しない純粋なエネルギーの消費を意味する。

では、それら三水準の力の体験はいかにして意味づけられ、秩序世界へと位置づけられるのだろうか。デュルケームは、集合力の体験に対する意味付与は事後的なものであり、事後的解釈によって共同体の象徴としての聖物が成立することを明らかにしている。デュルケームが論じたのは集合力についてであるが、バタイユの祝祭の事後的解釈についての議論と重ね合わせることで、その議論を〈消尽する力〉に応用することができる。〈消尽する力〉は、集合力とは異なり、社会に由来する力ではなく、差異化された秩序が消失するときに感受されるものであるが、その印象が事後的解釈によって聖物へと投射されたならば、この体験は秩序を保存するものへと変換される。社会秩序を構成するのは事後的な解釈の作用であり、解釈の基準となるのは、言語化不能な至高性の聖を位置づける価値基準である。よって聖をめぐる価値基準の変動が社会秩序の構造変動を導くと考えられる。

デュルケームの聖俗理論は、情動的凝集性を備えた〈共同体の聖〉の分析においては一定の有効性をもつだろう。しかし中間集団の自律性が一般にますます低下しつつある現代社会において〈共同体の聖〉を分析する聖俗理論の意義は特定領域を除けば薄れているとも言えよう。市場経済の発展に比例して世俗化が進行する現代社会を分析するには、聖の本質を原理的に問い直す必要があるだろう。本論は、デュルケーム理論の問題点の検討をとおして、聖の本質は〈至高性の聖〉として把握できること、至高性の聖の価値づけこそが意味世界の構成を規定することを示した。この観点から考察を深めるところに、デュルケームの聖俗理論を新たなかたちへと展開する可能性が見出されよう。

論文審査の結果の要旨

社会学的思考の歴史において、「聖なるもの」の概念は独得の重要性をもっている。というのも社会学は、狭義の宗教現

象に限らず、より広く、功利性や有用性という「俗なる」原則を超えた人間行動、あるいはそれに基づく社会現象一般にこの概念を適用し、その観点から分析を進める方法論を開発してきたからである。

社会学においていわば古典的な意義をもつ聖—俗対比理論は、エミール・デュルケームによって構築された。それは今日、社会学の共有財産として広く活用されているが、本論文「聖なるものの社会学——デュルケーム理論の再検討」は、このデュルケームの聖—俗理論を批判的に検討し、その再構成を図った意欲的な論考である。もとより、この種の試みがこれまでなかったわけではない。しかし本論文は、その批判の視点の斬新さ、検討の方法の緻密さ、再構成の大胆さなどにおいて、明らかに従来の水準を超えた成果を示している。

デュルケームの聖—俗理論の特色は、聖—俗の対比を社会—個人の対比に重ね合わせてとらえ、したがってまた聖を社会秩序の根本原理としてとらえるところにあるが、本論の論者は、デュルケームの仕事の集大成といわれる晩年の大作『宗教生活の原初形態』を綿密に検討して、デュルケーム自身、具体的事例の記述などにおいては、規範を侵犯し秩序を攪乱する聖の作用に関しても言及していること、しかし理論的にはそれらの事例の適切な位置づけに成功していないことを明らかにする。この齟齬は、論者によれば、デュルケームの理論が「個人意識」と「集合意識」との対比を基礎とする二元論的発想に立っていることから生じる。この二元論に立つかぎり、功利的な「個人意識」を超えたものとしての聖の働きはすべて、道徳性と概念的認識を特徴とする「集合意識」に回収されざるをえないからである。

デュルケームがその存在を指摘しながらも理論上うまく位置づけることのできなかった事例を理解するための手がかりとして、論者はジョルジュ・バタイユの議論を参照する。バタイユは、いかなる有用性にも奉仕することのない純粋な生命エネルギーの発現としての「消尽」や、記号的・言語的な認識の及ばない「非—知」といった独得の概念によって「聖なるもの」(バタイユの用語では「至高性」)をとらえようとしたが、論者によれば、この種の聖の体験や作用こそ、「個人意識」を超えているにもかかわらず「集合意識」に還元されえない聖の側面にほかならない。それゆえ、これを適切に取り扱うためには、デュルケームの理論的枠組そのものを再検討し、それを拡張していく必要がある。バタイユ流の観点からすれば、デュルケームのいう「集合意識」もまた社会秩序の維持という一種の有用性に基礎を置くものであり、その点では「個人意識」と同じ水準にあるといえる。そこで論者は、「個人意識」—「集合意識」の平面とは別に、一切の有用性を離れた「至高性」の水準を設定し、この水準に位置する「至高性の聖」を中核としてデュルケームの聖—俗理論を再構成することを提案する。そのことによって、デュルケームの議論にみられた混乱や曖昧さは克服され、より一貫した体系的理論構成が可能になる。

以上のような考察をふまえて、本論文の後半部では、「聖なるもの」が人間によってどのように体験され、またその体験が社会によってどのように意味づけられるかが検討される。デュルケームは、聖の体験を、個人を超越した社会の力、つまり「集合力」の体験としてとらえたが、論者は、デュルケームが記述している多くの具体的事例の綿密な検討を通して、「集合力」の体験には二種類のものがあること、またこれらとは別に、バタイユが指摘したような体験、つまり「消尽する力」の体験も存在することを明らかにする。このようにして論者は、聖の体験と作用を分析上、二水準、三種類に類別してそれらの相互関係を論じ、さらに、いかなる有用性とも無縁な「消尽する力」の体験が、社会的な意味空間のなかで、事後的な解釈によって、共同体の維持という有用な目的(あるいはそれを表示するシンボル)に容易に結合されうることを指摘する。この指摘はまた、デュルケームの理論的枠組自体がそのようにして成立した可能性を示唆するものでもある。

以上のように、本論文は、デュルケームのテキストの綿密な読解を通して彼の聖—俗理論を内在的に批判し、その限界を明らかにした点、またバタイユの議論を補助線として導入することによって、従来「聖の両義性」といった形でやや曖昧に処理されてきた論点に新たな光を当て、より体系的・整合的な理解と説明を可能にした点、さらにその観点から多様な聖の体験と作用を分析し、それらを位置づける理論的枠組を再構成することによって社会学的聖—俗理論の視野と可能性を拡大した点などにおいてすぐれた達成を示しており、高く評価することができる。なお、本論文は聖—俗理論の再検討であると同時に、その根底にある社会学的思考そのものの再検討、とりわけ社会学的機能主義の思考様式の再検討としても有意義なものであることを付言しておくべきであろう。

とはいえもちろん、さらに望むべき点もないわけではない。たとえば、ロジェ・カイヨワらの議論など、デュルケーム以降の社会学的聖—俗理論の展開への目配りがやや不足している点、あるいは細部を忽せにしない論述を心がけているのはよ

いが、結果的に論点の繰り返しが多くなり、やや煩瑣な印象を与える点などについては改善の余地があろう。また、議論が理論的次元に集中しているため、現実分析のツールとしての聖一俗理論にとって論者による再構成がどのようなメリットをもつのか、現段階では必ずしも明確でない面もあるが、これは今後の具体的分析のなかで検証されていくべき課題であろう。しかし、これらの点も、決して本論文の全体としての成果と価値を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2000年6月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行なった結果、合格と認めた。